

BOOK REVIEW

臨床 OT ROM 治療 ―運動・解剖学の基本的理解から 介入ポイント・実技・症例への展開

このような多事多難な時に、こんなに良い本を山本伸一さんたちに出していただいた。大きく感謝したい。私の率直な気持ちである。また、出版の労を尽くされた三輪書店にお礼を申し述べたい。

終末期リハを志向する者の一人として、関節拘縮や姿勢のゆがみは難敵であると思っている。最悪の時は、お棺にご遺体をお納めすることができず、人間らしい姿でお送りすることができなくなる。一方、急性期、回復期、生活期では、セラピストや病棟・施設スタッフらの知識不足、介入不足、技術不足のために人為的（言い過ぎであろうか？）に作られる関節拘縮や姿勢のゆがみがあり、直接的に、活動や参加に影響を及ぼす。予防対策もしっかりとしなければならぬが、介入は情性的であり、おざなりであるように見える。でも、スタッフは皆なんとかしなければと思っておられる。技術があるものなら知りたい、学びたいと思っておられる。

ところで、山本さんは、「臨床に関わる OT にとって、関節可動域（以下、ROM）への介入は、治療である」と断言されている。医師が聞いたら驚かれることだろうか。専門的な知識の統合と確かな技術と探求的で豊富な治療経験の蓄積を本書では

惜しげもなく披露をされ、解説されている。実にたわいもなく意味も知らずに覚え、学んだ学校時代の運動学と解剖学。その基本的理解から介入ポイントを見だし、技術に昇華されている。「うーん」となりたくなった。症例への展開が見事である。私は、特に、「第Ⅱ部 上肢・体幹の構造と ROM 治療」が参考になった。激痛で悩む片麻痺者の肩で ROM 治療を行ったところ、痛みが減少し、角度として 20° 近く肩屈曲角度が広がっていた。次の週にうかがった折に聞いたら、痛みが軽減したままで、角度も広がったままであると。この手技は、まさに効くなと思った。

実は、毎年開催される CVA 時期別研修会で山本さんが講師を務められる時、必ず指導をされるのがこの上肢に対する ROM 治療である。やってみて驚きの声と表情が全参加者から上がるが、本書を読んでから参加されると一層手技の獲得がしやすいぞと気づいた。

OT が ROM の治療者として存在していることは、クライアントにとり大きな安心になると思う。本書を読まれ、技術を獲得するための研鑽と、さらなる手技の開発を怠らないでいただきたい。



● 山本伸一＝編

(B5 判/256 頁/4,200 円 + 税/三輪書店/2015 年)

評者

澤 俊二

金城大学医療健康学部
教授、作業療法士